

令和3年

恵庭市議会第4回定例会

所 信 表 明

令和3年恵庭市議会第4回定例会の開催に際し、お許しをいただき市長就任に当たっての私の所信の一端を述べさせていただきます。

この度、任期満了に伴う市長選挙により引き続き市政を担うことになりました。改めて市長という職責の重さに身の引き締まる思いをかみ締めるとともに、4期目に向けて気持ちを新たにしているところでございます。

私はこれまでの3期12年間、豊かな自然や優れた農業、地理的優位性といった、恵庭の財産を存分に活用しながら、この恵庭に暮らすすべての市民が「恵庭に住んで良かった」と思っただけのよう、市民の皆様とともにまちづくりを進めて参りました。

この間様々な懸案や課題はありましたが、市議会をはじめ多くの方々の力をお借りして、お蔭様でこの12年間で市民と約束した施策の大方について具体化することができました。これも市民の皆様並びに議員各位のご理解とご支援があったからこそ成し得たものであり、深く感謝を申し上げます。

4期目の市政執行に当たりまして、私は、新たに「花と緑あふれるガーデンシティ」を目指して、「輝く恵庭をつくるアクションプログラム」と名づけた7つのプログラムをもって、恵庭のもつ大いなる可能性を追求して参りたいと考えております。

その基本となる考えと決意を述べさせていただきます。

まず、1つ目は、新型コロナウイルス感染症に対する「コロナ克服プログラム」の実行です。

世界中に感染拡大した新型コロナウイルス感染症に対し、これまで市民の皆様日々の感染症対策への徹底を呼び掛けるとともに、恵庭市医師会など関係機関と連携し、ワクチンの早期接種に努め、市民の命を守る取り組みを進めて参りました。

ここに来て感染者の数は減少してきており、行動制限も徐々に緩和されてきておりますが、今後については決して油断できる状況にはありません。

コロナ対策として、3回目のワクチンの早期接種をはじめ、感染予防対策の徹底に向けた取り組みを引き続き図るとともに、国や道などと十分連携しながら、コロナで影響を受けた世帯や売り上げ回復を目指す事業者への支援を行ない、地域経済の底上げとポストコ

ロナに向けたまちづくりを進めて参ります。

2つ目は、希望を持って子育てしたくなる「子育て支援プログラム」の実行です。

恵庭は、「優れた子育てのまち」です。

これまで、本市では、産後間もない養育者を対象にした「産後子育てサポート事業」や保育サービスの拡充をはじめ、子どもたちが健やかにたくましく育ち、子どもの笑顔が溢れるまちを目指し、「子どもひろば」や「子育て支援センター」、「学童クラブ」などの子どもの居場所づくりの充実に取り組んで参りました。

さらなる子育て環境の充実に向け、妊婦通院費助成の新設やこども医療費助成の拡大を進め、妊娠・出産・子育てへの切れ目のない支援に取り組んで参ります。

また、恵庭は、「優れた教育のまち」でもあります。

読書活動や通学合宿、土曜授業など、地域の方々や教育現場の主体的な活動が進められています。今後も、そうした優れた取り組みを大切にし、子ども達の中にふるさと恵庭を思う心が醸成されるよう、地域ぐるみの教育活動をさらに進めて参ります。

さらに、子どもたちが知・徳・体のバランスの取れた成長を遂げ、高度情報化、国際化、価値観の多様化する社会をたくましく生きていく力を身に付けることができる ICT 教育の推進や、ヒューマンコミュニケーションの促進など、教育環境の充実を図って参ります。

3つ目は、ガーデンシティとしての可能性を生かした「魅力あるまちづくりプログラム」の実行です。

私は、恵庭はまだまだ多くの可能性を秘めた、魅力あふれるまちであると自負しております。

ガーデンシティとしての可能性を生かし、環境に配慮した住宅地の展開や JR 3 駅周辺のにぎわいづくりの推進に取り組み、田園のやすらぎと都市の活力が共存する田園都市を進めて参ります。

更に、市民が豊かな自然を身近なものとして享受できる体験の場として、自然環境型リクリエーション施設の整備や自然あふれる盤尻地区のまちづくりを目指して参ります。

また、柏陽地区の再生につきましても、迅速かつ着実に整備が促進されるよう取り組みを強化して参ります。

4つ目は、地域が助け合い、誰もが健康で安心して暮らせる「安全安心プログラム」の実行です。

障がいのある方はもとより、子どもからお年寄りまで、誰もが健康で自分らしく充実した生活を送れるよう、地域で支えあい、助け合える環境となることが最も重要であり、まちの基礎であります。

高齢化が進み、超長寿社会の中、ご高齢の方々が安心して日々の生活を続けられるよう、住まい・医療・介護・健康・生活支援に一連の関係性を持たせ、個々の実情に合った「包括ケアシステム」の推進に努め、在宅ケアの充実を図って参ります。

更に、ヤングケアラーを含めたケアラーへの取り組みとして、ケアラー条例の制定を目指すとともに、実情にあった施策の構築に努めて参ります。

併せて、実際にドナーとなった際に負担が大きい骨髄ドナーへの助成の実施や、入浴介護の支援策としての通所入浴施設の設置についても、取り組んで参ります。

子どもから高齢者まで気軽に利用できる屋内外のスポーツ施設の充実を図り、夢と健康を育むスポーツのまちづくりに取り組んで参ります。

また、国内で多発する自然災害への備えとして、緊急時防災無線の整備や災害発生時の給水拠点となる緊急貯水槽の整備など、災害リスクに対応する強靱なまちづくりを進めて参ります。

島松駅周辺については、島松駅のバリアフリー化と合わせて、民間活用による複合施設の検討を進め、島松地区の活性化と暮らしやすいまちに向けた取り組みを進めて参ります。

5つ目は、活力ある地域経済を目指し、域内循環が進む「経済活性化プログラム」の実行です。

希望と活力ある恵庭のまちを次代の市民に引き継いでいくには、地域経済を活性化し、働く場を確保するとともに、「もの」や「お金」が回る域内循環を推進することが重要であ

り、それが持続可能なまちづくりにつながるものと考えています。

恵庭市の基幹産業である農業が、将来にわたって持続的に発展するためには、土地改良事業や基盤整備事業の計画的な整備はもとより、最先端技術を活かしたスマート農業の推進など希望を持って営農を続けることができるよう、農業者や関係団体と連携し取り組みを進めて参ります。

更に、新たな工業団地の検討やコロナ禍により注目度が増しているサテライトオフィスの設置を進め、地域経済と雇用を支える商工業の底上げを図って参ります。

また、これまでも市民の安全を守り、恵庭の発展と地域経済を支えてきた自衛隊の体制維持強化の運動を引き続き推進し、希望と活力ある恵庭のまちづくりに向けて取り組んで参ります。

6つ目は、自然や地域コミュニティの充実による「豊かなライフスタイル実現プログラム」の実行です。

優れた地理的環境にある恵庭は、豊かな自然と産業に恵まれています。

日々の暮らしの中で、ゆとりのある時間と空間を享受しながら、誰もが自らのライフスタイルを実現できうる環境にあると思います。このまちに惹かれ、このまちで暮らすことを選択していただけるよう、きめ細やかな情報発信による移住定住の充実について進めて参ります。

恵庭には多くの外国人が居住されています。彼らの日々の生活が暮らしやすいものになるよう、不便や不安なことを解消できる環境整備に向け、多文化共生のまちづくりへの取り組みを推進して参ります。

更に、市内高等教育機関との連携による、地域課題解決に向けた幅広い分野での政策研究や活動を展開する、「知の拠点」の形成に向けた取り組みも進めて参ります。

7つ目は、効率的な行政運営に対する「まちづくり推進プログラム」の実行です。

人口減少社会において、将来的に税収減などによる財政の縮小が見込まれる中、地域課題の解決や行政サービスを効率的かつ効果的に提供するためには、中長期的な視点をもと

に、安定した財政運営を確立することが重要であります。

事務事業の見直しはもとより、民間活力の活用や窓口業務のスマート化など、行政システムを不断に見直し、効率的・効果的な事業運営による市民サービスの一層の向上に取り組んで参ります。

市民が元気なまちは、まちも元気です。

多くの市民が様々な場面で、まちのため、人のために活躍されています。私は、こうした市民の活躍に勇気をいただき励まされてきました。

これからも、市民との直接対話を拡大し、市民とともに考え、市民とともに実行する、市民による市民のためのまちづくりを進めていきたいと考えています。

以上、市政を運営するに当たっての、私の所信の一端を述べさせていただきました。

昭和36年元旦。京町在住の佐藤精一郎宅に雄物川会のメンバー7人が集まった。全員秋田県雄物川町出身である。毎年、正月は皆が集まって酒を酌み交わしながら、故郷の話に花を咲かせていた。(広報えにわシリーズ「恵庭の歴史を歩く」から。)

第二の故郷恵庭の町を秋田の故郷のような美しい環境にしたい。佐藤はその思いを仲間に伝え、7日後の1月8日には設立総会を開いている。今年60周年を迎えた花いっぱい文化協会のはじまりである。花苗のあっせんや道路公園での花壇造成、花壇コンクールなど、市民主体の同協会活動は拡大を続けながら、現在も花のまち恵庭を支えている。

平成2年、市制施行20周年の年に第1回恵庭・花とくらし展が開催された。この時「花のあるまちづくり」と題するシンポジウムが行われ、ニュージーランド・クライストチャーチ市の美しいスライドとともに市民によるガーデンコンテストが紹介された。この講演のわずか5か月後には、その美しさに感激した市民らが「花の旅」を企画、花卉生産者や市職員など13名の視察団がニュージーランドへと飛び立った。

恵庭の花弁栽培の先駆者でもある団長の藤井哲夫さんは「スライドで映し出されたクライストチャーチ市民手作りの庭園は、まさに天国の花園ではないかと見まがうばかりの美しさにあふれていた」と視察報告書に記しています。

視察団は、市内各所で報告会を行い、ニュージーランドの庭園に多くの市民が感銘を受

け動き出す。

2か月後には、恵み野花づくり愛好会が結成された。

ここでも、始まりは主体的な市民の手によるものでありました。

こうした花のまちづくりは年とともに拡大発展し、「都市景観大賞」や「緑の都市賞」をはじめ数々の受賞を重ねながら「花のまち恵庭」の名が全国レベルに達しました。このことが、来年恵庭市をメイン会場とする「ガーデンフェスタ北海道2022」の開催決定につながったことは、まちがいのないことであります。

このフェスタをなんとしても成功させ、「花のまち恵庭」の魅力を全国に発信し、関係人口拡大の絶好の機会として捉えたいと考えております。

「ガーデンフェスタ北海道2022」は花のまち恵庭の集大成とも言えますが、同時に将来への序章でもあります。これをスタートと考え、より住み良いまち、暮らしやすいまちへと飛躍すべく、私自身が先頭に立ってつき進んで参ります。

市民の皆様、市議会議員の皆様の一層のご理解とご協力をお願いし、就任にあたっての所信といたします。